貴族のお坊ちゃんだけど、世界平和のために勇者のヒロインを奪います

4

大沢雅紀

Osawa Masaki

魔皇妃カイザーリン
魔皇帝ダークカイザーの復活を画策する、謎の男装の麗人。
リン
世界を破滅に導くヒロインの一人。リトネをお兄ちゃんと慕う。
ナディ
世界を破滅に導くヒロインの一人。シャイロック家の令嬢で、オタク気質。
ネリー
シャイロック家の元メイド長。カイザーリンとともに、策謀を巡らせる。
ミルキー
ドラゴンの赤ちゃん。リトネのことを親だと思っている。
カエデ
世界を破滅に導くヒロインの一人。傲慢で高飛車なお嬢様。アベルに惚れ込んでいる。
マリア
世界を破滅に導くヒロインの一人。控えめでやさしい性格だが世間知らず。金貸しを軽蔑している。
貴族のお坊ちゃんだけど、世界平和のために勇者のヒロインを奪います④
アベル
いずれ勇者として覚醒する少年。金貸しへの恨みを募らせる。
リトネ
世界の命運を託された貴族のお坊ちゃん。前世の経済知識とヘンテコ能力で、勇者が圧政を敷くという絶望の未来の回避に挑む。
主な登場人物
MAIN CHARACTER
MAIN CHARACTER

†　フジ山

アベル一行が魔皇妃カイザーリンの封印を解く少し前――。
リトネは、竜王母マザードラゴンと竜の赤ちゃんミルキーとともに、フジ山を訪れていた。
そこで、リトネは風竜王フェザードラゴンに勧められるまま『竜精酒』を飲み、鋭い爪と真っ黒い鱗に覆われた黒竜へと変じたのだが――。
現在、リトネは竜の姿のまま氷山が乱立する北の未開地でフェザードラゴンにしごかれていた。
「ほらいけ！」
フェザードラゴンに放り投げられて、岩山や氷山にぶち当たる。人間の時に比べれば、ダメージは少ないが、痛いことに変わりはない。
「もう嫌だ！　こんな修業になんの意味があるんですか！」
リトネは泣きながら訴えるが、フェザードラゴンは以前師事していたマザードラゴン以上に言葉足らずで脳筋だった。
「うるせえ！」

フェザードラゴンはリトネを拘束すると視認不可能なスピードで飛び上がり、再度、リトネを氷山めがけてぶん投げるとともに、雷撃を放つ。
「ひえええ！　もういやだ！」
北の大地に、雷で黒焦げになった黒竜が横たわっていた。
しばらくして、リトネの意識が戻る。
「ええっ？」
あたりを見回せば、先程よりも周囲の景色が大きくなっていたので、慌てて自分の手を確認すると肌色の人間のものになっていた。
「や、やった。なんだかわからないけど、ついに人間に戻れた！」
瞬間、リトネはいきなり後頭部を鷲づかみにされ、氷の洞窟に放り込まれた。
「坊主、起きたか。こっちにこい」
声の主は、人間の姿になったフェザードラゴン。
「飯をつくってやったぞ。食え」
洞窟の奥では薪がくべられ、大きな魚が焼かれている。
「あ、ありがとうございます」
リトネはおとなしく焚き火の前に座り、魚を食べ始める。
一方のフェザードラゴンは鼻をフンッと鳴らすと、リトネの対面に座り酒を飲み始めた。

二人の間に、沈黙が下りる。この機会に……と、リトネはかねてから思っていたことを聞いた。
「フェザー様。どうしてこんなに焦って俺を鍛えようとするんですか？」
「この間も言ったろう。ムスメを守るためだ」
「……ミルキーはフジ山にいれば安全だし、フェザードラゴン様や師匠もいるので危険はないかと思いますが……俺を必死に鍛えようとしているのは、何か別の理由があるんじゃ……」
リトネの言葉にフェザードラゴンは黙り込み、杯を傾けた後、重々しくその理由を語り始めた。
「実はな……俺が復活したことで、未来が変わっちまったんだよ」
リトネはそれを聞いて、首をかしげる。
「……未来が変わった？」
「ああ……封印から解放された後、俺はこの惑星の『気』の流れを読んでみた。すると、とてつもなく邪悪な黒い『気』を持った奴が復活して、竜族に戦いを挑むという未来が見えてしまった」
フェザードラゴンがなんともいえない顔をして言葉を継ぐ。
「俺がおとなしく大地に封印されていれば、奴を刺激することもなかったんだろうが……どうやらそいつは、この星の生物の守護者である竜族そのものを滅ぼそうと決めたらしい」
リトネは黙って、フェザードラゴンの話に耳を傾けていた。
「この戦いの結末はわからん。この四百年で竜族はすっかり平和ボケして弱くなっちまいやがったからな。俺の身命を賭すしかないが、この世界を守りきれるかどうか……」

「フェザードラゴン様……」
「そんな顔をするな……覚悟はできているさ。家族は守らねえとな」
そう呟くフェザードラゴンの顔は、世界を滅ぼす伝説の邪竜のものではなく、ただ家族を守り通そうとする夫、そして父親のものであった。
「頑張りましょう。俺も死ぬ気でミルキーを守ります」
リトネはそう応えつつ、気合を入れるのだった。
「『竜精酒』は、飲んだ人間の肉体を竜に変化させる。お前は『気』を失ったことで元の人間に戻ったが、大自然から『精気』を吸収する技を身につけることができれば、再び竜になることも可能なはず。やってみろ」
リトネはアドバイスに従い、大自然と自身の精神をつなげるイメージを練り上げていく。
やがて、その身から雲のような『気』が噴き上がると、徐々に人間としての輪郭が崩れ……視界を覆う『気』が晴れた時、リトネは再び黒竜と化していた。
「よくやった。そこまでできれば、『雲竜拳』は習得したも同然だぜ。ついてこい」
リトネは洞窟を出て、フェザードラゴンが大空に羽ばたくのを見上げる。
「何しているんだ。来いよ」
「……飛べません……」
むなしく地上を這い回るリトネを眺め、フェザードラゴンが怒号を飛ばす。

「てめえには……やっぱりカラダに叩き込むしかねえな！」
フェザードラゴンは風を操りリトネを持ち上げると、音速を超えるスピードで氷山に叩きつけた。
「まったく、物覚えが悪いやつだぜ」
フェザードラゴンは呆れつつも、氷に埋まったリトネを引きずり出す。
「ううっ……無理ですよぅ。そもそも人間は空なんて飛べません」
「馬鹿か。今のてめえは竜だろうが」
リトネが泣き言をこぼすと、フェザードラゴンは容赦なく怒鳴りつける。
「いいか。てめえは自在に竜に変化する術を身につけたんだ。つまり、あと一歩で『雲竜拳』をマスターできる。そうすれば……勇者アルテミックに並べるんだ」
「でも、どうすれば？」
「てめえはすでに、『人間』という枠からはずれたんだ。次は『生物』という枠にとらわれず、大自然の『気』と一体化し、流れに身を任せてみろ。それができれば、空を飛ぶことなど容易いはずだ」
「そんなこと言われても、わかりません……」
「頭で考えるな！　感じろ！」
そう言うやいなや、フェザードラゴンはリトネをつかんで空に飛び立つ。
「今度は本気で放り投げるからな。『雲竜拳』を身につけられないなら……死んでしまえ！」

星を一周して勢いをつけたフェザードラゴンが、凄まじい力でリトネをぶん投げた。
「嫌だぁぁぁぁぁぁぁぁ」
眼前に迫ってくる岩山を死に物狂いで避けようとした時、リトネは本能的に『何か』に触れる。
疑問に思う暇すらなく、その『何か』にすがって体を動かすと、わずかに自身の進むコースが変わり、岩山をかわすことができた。
(いま、何もない空中で向きを変えられたよな。どうやったんだろ)
ほんのわずかの間、リトネが考え込んでいると、前方に新たな岩山が迫ってくる。
(もう一回だ！　……空中に張り巡らされた細い流れみたいなのを手繰って……)
自分の身体から出ている魔力と、空中に存在する魔力の流れを結びつける。
(いまだ！)
大気に漂う魔力の流れに身を委ね、今度は迫り来る岩山をしっかりとかわすことができた。
(よかった……助かった……)
リトネは、あらためて自分を取り巻く魔力の流れを探ってみる。
瞬間、自身の周りのみならず、この惑星を取り巻く何百万本もの魔力の川を全身で感じることができた。
「ふん……どうやら、つかめたらしいな」
いつの間にか傍らにいるフェザードラゴンが、仏頂面でリトネに告げる。

「フェザードラゴン様……この魔力の流れは？」
「それが大地を取り巻く『精脈』だ。試しにその身を『雲』のように軽くすることをイメージしてみろ。そして、『精脈』と一体化するんだ」
フェザードラゴンの助言に従い『精脈』の流れに乗ると、そこから無限の魔力がリトネの体内に入り込んでくる。
「よし。そのまま大自然の『精脈』と同化しながら、身体から『気』を抜き人間の姿に戻ってみろ」
言われた通りにして、黒竜と化していた身体を消した後、再度、人としての身体をイメージすると……元の姿に戻ったリトネがフワフワと浮いていた。
(ああ……俺は今、空を漂っている)
眼下に広がる惑星を自分の腕で抱きしめているような全能感を覚えて、リトネは歓喜する。
「どうやら、大地の精と一体化し、その魔力を体内に取り入れたようだな」
気がつくと、人間の姿になったフェザードラゴンが傍らにいる。
「フェザードラゴン様。ありがとうございます。あはは。楽しいな」
リトネが調子に乗って空を駆けていると、彼方からマザードラゴンがやってきた。
「リトネ、よくやったぞ。おぬしは竜のごとく自在に空を飛び、無限の魔力を大地から得る『雲竜拳』を身につけた。これで、勇者アルテミックと並んだのう」

「アルテミックに並んだ……」
「そうじゃ、お主は人間の身で、我ら竜王とほぼ同じレベルになったのじゃ。大空の全てがお主のもの。大地の鎖から解き放たれた自由を楽しむがよい」
マザードラゴンの祝福の言葉に、リトネは歓喜の雄叫びをあげるのだった。

†　天空城ラビュター

リトネは『雲竜拳』を極めるために、世界を飛び回っていた。
「よし。次はさらに上空まで昇ってみよう」
大地から噴き上がる『気』の流れをつかみ、雲を越え、対流圏を越え、成層圏まで達しようとしていたリトネの目に、巨大な塊が映る。
「え？　あれってもしかして……」
さらに近づいてみると、馬鹿でかく、ＵＦＯのような形をした巨大な城を発見した。
「これって、もしかして天空城ラビュターか？」
勇者が魔王の城へ出陣する前に訪れるという、神の城がそこにあった。
「……面白いな。ちょっと寄ってみるか」

好奇心に突き動かされたリトネが入り口らしき扉の前に立つと、謎の声が響きわたった。
「……ドラゴンマスター、カクニン。ニュウジョウヲキョカスル」
次の瞬間、大きな音とともに開かれた扉の先には、背中に白い二枚の羽を生やした水色の髪の少女がいた。
「……君は？」
ニッコリと笑いかけてくるその姿にリトネは驚愕する。
眼前の少女は髪型こそ違えども、妹のように可愛がってきたリンにそっくりだったからである。
「私はリリン。女神ベルダンティーに仕える天使です。『竜者』リトネ様、ようこそおいでくださいました」
リリンに手を引かれて城の一番奥の間まで行くと祭壇があり、その上に巨大な水晶玉が設置されていた。
「よくぞここまで来てくれました……『竜者』リトネよ」
水晶玉に浮かんだのは、紛れもなく女神ベルダンティーの姿。
「女神ベルダンティー、久しぶりだな。ところで、『竜者』とは？」
「勇者を超える者。全ての生物の守護者である竜に認められ、心を通わせた者のことです」
ベルダンティーが明るく笑いながら答える。
「まあ、確かにドラゴンたちとは仲良くなったけど、俺は特に何もしてないような……」

「いいえ。あなたのおかげで、考えうる限りの最悪の未来は回避できました。心からお礼を申し上げます」
水晶玉の中で、ベルダンティーが深く頭を下げた。
「最悪の未来では……アベルとヒロインたちが民衆に虐殺された後、制御不能となったミルキーが人を襲うようになるのです」
水晶玉に映像が浮かぶ。そこでは白い竜に成長し、人間相手に暴れまわるミルキーが映っていた。
「しかし、ミルキーはまだまだ幼い竜です。あっという間に人間たちに取り押さえられ、切り刻まれた上で食べられてしまいます」
苦々しい表情でベルダンティーが呟く。
映像が切り替わると、何本もの槍を刺され、血を流してのたうちまわる白い竜が浮かんだ。
「本当に、救いようがない未来だな。待てよ、ミルキーにこんなことをすると……」
「お察しのとおり、この後、怒り狂ったマザードラゴンが人間たちを襲いました。さらに、その怒りに応じるように、封印されていたフェザードラゴンが復活して……」
――巨大な緑色のドラゴンが『風の墓場』から起き上がる映像が浮かぶ。娘の死を感じ取り、血の涙を流して悲しむフェザードラゴンが発生させた竜巻に、マザードラゴンが炎を乗せた。
業火の竜巻が惑星全土を覆い、生きとし生ける者全てを焼き尽くしていく。
ほとんどの生物が死に絶えた世界で、全ての力を使い果たした二体の巨竜が折り重なるように倒れる。こうして、世界は滅亡するのだった。
あまりに悲惨な映像にショックを受けたリトネが顔を歪める。
「この映像はあくまで、今のあなたがいなかった場合のシミュレーションです。そして、未来は確実に変わりつつあります。あなたのおかげでフェザードラゴンは理性を取り戻し、破壊神から守護神へ戻りました。彼は全ての生き物の守護者として、邪悪な魔物と戦ってくれるでしょう」
水晶にドラゴンの村が映し出されると、デレデレとしたフェザードラゴンが映った。
「可愛い可愛いミルキーちゃん。いい子でちゅから一緒に遊ぼうね～」
髭もじゃの大男が赤ちゃん言葉で呼びかけている様は、不気味なことこの上なかった。
ミルキーはプンっと顔を背けるが、逃げたりはせず、チラチラと大男の様子をうかがっている。
「いい加減にするがいい、この馬鹿旦那め！」
その様子を見ていたマザードラゴンが、どやしつける。
「だ、だけどよう。なんとかして俺をパパと認めてもらいたいと思って……。とりあえず、一緒に遊んで信頼関係を築こうとしているんだよぅ」
マザードラゴンにしばかれたフェザードラゴンは、涙目で言い訳をした。
それを見てミルキーがきゅいきゅいと笑う、実にほのぼのとした様子が伝わってきた。
「そうか……よかった」
ホッとしたリトネはいい機会だと、ベルダンティーに気になっていたことを聞いた。

「なあ。魔族ってなんなんだ？　そもそも、なんで魔皇帝ダークカイザーは俺たち人間に戦いをしかけてくるんだ？」
それを聞いたベルダンティーは、悲しそうな表情を浮かべる。
「それを知ると魔族と戦いづらくなるかもしれませんが、よろしいですか？」
「かまわない。この際だから全て教えくれ」
リトネの言葉にうなずき、女神ベルダンティーはこの世界の創生秘話を語り始めた。
この世界は、数万年前に『神』が現れたことから始まったという。
「神が現れた？　どこから？」
「こことは別の世界……すでに地球が滅んだ異世界からです。異世界の地球が滅びかけた時、神々は、魂を機械にインストールして保存すると、それぞれが別の世界へ旅立ったのです」
ベルダンティーの目には、涙が浮かんでいた。
「つまり、この惑星は地球のパラレルワールドなんだ？」
「はい……私たちのグループは未発達の地球のある世界に渡って、全てを作りなおすことにしました」
ベルダンティーはさらに続ける。
「私たちはさっそく生命の種をまき、一世代ごとに進化するように調整しました。その計画はうまくいき、わずか数万年でこの惑星に命が満ち溢れる世界をつくったのです」

ふと、ベルダンティーの顔が歪む。
「喜んだ私たちはさっそく転生しようとしたのですが……思わぬ計算違いが起こってしまいました」
「計算違い？」
「はい……肉体を奪われることを嫌った知的生物――魔族が、神々の魂を受け入れることを拒否したのです」
こうして神々と魔族の肉体を懸けた戦いが始まった。
「神々はしかし劣勢になり、仕方なく、転生用に調整した生物――人間を作り出し、転生していきました」
「えっと……神々が生物を作れるのであれば、魔族の肉体にこだわる必要はないのでは……？」
「神々がその能力を保ったまま転生するには、魔族の肉体が必要だったんです。神々の魂をそのまま受け入れる容量は、人間の肉体にはありません……。神々が魂を劣化させて転生した存在、それがあなた達のような『魔力持ち』の人間です」
人間が生まれた後も、神々と魔族の争いは絶えることがなかった。
そうして長い長い戦いの果て、ついに魔族は人間の勇者により封印されたのだった。
「神々は私を残して転生していきましたが、十年前、思いもよらないことが起きました。転生制御装置『リンネ』が故障してしまったのです。私は四百年前に捕らえた魔皇妃カイザーリンの肉体か

ら魂を抜き出す研究を続けていたのですが……失敗に気づいた時は、すでに手遅れでした」
「どうなったんだ？」
「カイザーリンの魂を抜き出すことには成功していました。しかし、その魂は一時的に『リンネ』を乗っ取り、いくつかに分かれて天使の肉体に入り込んでしまったのです。彼女たちは、『天雲人（てんうんじん）の小船（こぶね）』に乗って地上に逃げ出しました。その魂は今、あなたとともにいるメイドに……」
「ちょっと待ってくれ！　どういうことなんだ！」
「あなたがこの城に入ってきた時、今までの記憶をスキャンさせていただきました。あなたの大切な妹である『リン』と、メイド長である『ネリー』は、カイザーリンの魂がインストールされた分身なのです」
「ど、どうすればリンを救えるんだ」
リトネは水晶玉をガクガクと揺さぶるが、ベルダンティーは困った顔をしてうつむく。
「……わかりません」
ベルダンティーがそう告げた時、部屋に天使リリンが入ってきた。
「申し上げます。魔皇帝ダークカイザーの波動を確認しました。復活したようです」
「そ、そんな！　なぜ⁉　まだ復活までしばらくかかるはずでは⁉　くそっ！」
それを聞いたリトネはギリッと歯をかみ締めつつ、ベルダンティーに尋ねた。
「どうしたらいいんだ？　教えてくれ！」

「魔皇帝ダークカイザーはアルテミックにより、すでに肉体を滅ぼされています。ですから、自らの魂を宿すことができる『依り代（よりしろ）』を探すでしょう」
ベルダンティーが応じる。
「依り代だって……。それは？」
「ダークカイザーの魂を収めることができるほど進化した肉体……いわゆる『勇者』です」
「なら、アベルをどうにかしないと！」
それを聞いたリトネが、城の外に向かって走り出す。
「いえ……アベルは未熟。ダークカイザーの本当の狙いは……リトネ、あなたでしょう」
しかし、ベルダンティーの言葉はリトネに届いていなかった。

◇　◆　◇　◆　◇

リトネは城外に出て黒竜の姿で空を飛び、ダークカイザーの『気』を探った。
「坊主（リトネ）！　この大変な時にどこをほっつき歩いていたんだ！」
怒声とともにフェザードラゴンが現れる。
「す、すみません！」
「話は後だ。てめえはポムペイ山へ向かえ。そこで闇の魔公が復活しようとしている『気』を感じ

た。どうにかしてこい！」
一言そう告げるなり、フェザードラゴンはリトネに背を向け飛び去ろうとする。
「待ってください。フェザードラゴン様はどこに？」
「……やつら魔族は、人間だけじゃなく、神々が作り出した生物全てに憎しみを抱いている。だからこそ、生物の守護者たる竜王の俺が止めなきゃならん」
「まさか……フェザードラゴン様が魔皇帝ダークカイザーを？　で、でも、闇の魔王に対抗できるのは光属性の魔力をもつ勇者アベルだけなのでは……？　フェザードラゴン様は風属性……」
リトネの疑念に、フェザードラゴンはフッと笑う。
「心配するな。戦いようはある。てめえは自分の役目を果たせ。『雲竜拳』を身につけたとしても、六魔公の一人である闇の魔公の力は強大だ。ダークカイザーと合流されたら……手がつけられなくなる。そっちは任せた」
「……わかりました。ご武運を！」
「おう。てめえも負けんじゃねえぞ。もし負けて尻尾巻いて帰ってきやがったら、人間を滅ぼしてやるからな！」
「は、はい！」
はじかれたように飛び去るリトネ。
「……ここから先は、アルテミックすら到達できなかった領域だ。『闇』で『闇』を倒すやり方を

編み出してみせろ。それができりゃ……安心して、てめえに後の世界を託せるからな」
そう呟きつつ、フェザードラゴンは凄まじいスピードでデスマウンテンに向かった。

†　ポムペイ山　山頂付近の洞窟

リトネがフジ山でフェザードラゴンとともに修業に取り組み始めた時――。
シャイロック家の令嬢であるナディは、アベルに剣で貫かれ瀕死の状態に陥っていた『闇の戦乙女ノワール』から、テレパシーを通じてポムペイ山に呼び出されていた。
そして今、ポムペイ山の洞窟にて、石棺に保管していた元の肉体に戻ったノワールとナディが、氷漬けの巨大な虎の魔物――『闇の魔公』の復活を阻止していた。
「これが闇の魔公マルコキアスじゃ。太古に生きていた巨虎族の最後の生き残り。触れるもの全てを凍らせたと伝えられておる」
「……すごく大きい……しかも全身が硬いシールドで覆われている」
数十メートルにもおよぶ巨大な虎は黒い氷で覆われていたが、よく見ると小刻みに震えている。
「ワシと一緒に奴を抑えてくれ。時間稼ぎにしかなるまいが、我らの望む『竜者』が生まれる未来に世界を導くには、こやつに邪魔されるわけにはいかぬのじゃ」

「……がんばる。『闇氷（ダークアイス）』」
――一ヶ月後、マルコキアスとの一進一退の攻防の中、ふいにノワールが顔を上げた。
「感じたか？」
「……感じた。どこかで強大な闇の力が復活した」
額に汗を浮かべつつ、ナディがノワールに答えた。
「……もはや、これまでじゃな。今までよく封じてくれた。後はワシに任せろ」
ノワールが穏やかな口調でナディに告げる。
「オババ様？　何をするの？」
「……『竜者（りゅうしゃ）』に一度会ってみたかったがのう。こちらに向かっておる『気』は感じるが、間に合いそうにない。よいか、ワシが今からすることをよく見ておくのじゃ」
そう言うと、懐（ふところ）から『闇の猫目石』を取り出して、マルコキアスに向けてかざす。
「『闇』で『闇』を滅ぼす禁断の魔術じゃ。極大吸収魔法『大虚空（メイルストローム）』発動！」
呪文を唱えると同時に『闇の猫目石』が輝きを放ちつつ、黒さを増していく。
次の瞬間、マルコキアスの身体から真っ黒い魔力が立ち上り、石に吸収されていった。
「……すごい！　マルコキアスの魔力がどんどん下がっていく！」
魔皇帝の復活によって増大したマルコキアスの闇の魔力が猫目石に吸い込まれていくとともに、マルコキアスを取り巻く闇のシールドが薄れていった。

「……こんな技があるなら、最初から使えば……え？」
そう言いかけたナディの目には、猫目石に収まりきらず、ノワールを侵食する闇の魔力が見えた。
「……くく……ワシの魔力容量じゃこれが限界か……。ならば……仕方ない」
杖を掲げて、ノワールが叫ぶ。
「闇の精霊よ。我が命、汝（なんじ）に捧げん。大魔王ダークミレニアムよ。来るがいい！」
ノワールの呪文に応じて上方に小さな穴が空き、そこから生じた触手のようなものが彼女の身体に巻きついた。
「オババ様！」
「来るでない。ワシができることは、マルコキアスの魔力を可能な限り吸収してシールドを無効化し……闇の大魔王にワシ自身を食わせることぐらいじゃ……こうしてマルコキアスの力を削げば、『竜者（りゅうしゃ）』が……今まさにここに向かっておる『竜者（りゅうしゃ）』リトネが、奴を倒してくれるだろう」
瞬間、ノワールは触手ごと穴に吸い込まれて消えていった。
「……リトネ……遅い。オババ様が死んじゃったよ……」
後に残されたナディはこの一ヶ月の間、一緒にすごした祖先の死を嘆き悲しむ。
しかし、状況はナディに充分に死を悼（いた）む暇を与えなかった。
「グウァアアアアアアアアアアアアア」
氷が砕け散り、マルコキアスが動き始め、ナディに向かって吼（ほ）える。

「……私は『闇の戦乙女』ノワールの後継者。アンタなんかに絶対負けない！」
ナディは地面に落ちた『闇の猫目石』を拾い上げ、マルコキアスに立ち向かった。
『闇氷槍（ダークアイスランス）』
ナディの杖から生まれた氷の槍がマルコキアスに襲いかかる。
「グォオオ！」
手痛い一撃に怒りの咆哮（ほうこう）をあげたマルコキアスが、ナディに向けて黒い霧を放つ。
「これは！　……寒い……眠い……」
霧に触れ、ナディは徐々に魔力と生命力を失っていった。
ナディの白い肌が、どんどん闇に染まるとともに、意識が朦朧（もうろう）としていく。
（……もうだめ。リトネ……）
諦めかけた時、首にかけた『闇の猫目石』から思念が伝わってきた。
（しっかりせんか。我が後継者よ。ワシは闇の精霊と一体化しただけじゃ。いつでもおぬしの傍（そば）におる。今こそ、『闇の戦乙女』の後継者として奴を倒すのじゃ）
消えたはずのノワールの思念が、ナディの凍りつきそうな心を暖めていく。
「はい！　私はシャイロック家の姫！　リトネの婚約者！　絶対に負けない！」
ノワールに導かれ、ナディが黒い霧に意識を集中させる。
（そうじゃ。闇とは本来、安らぎに満ちたもの。昼の光の下で競争することに疲れた生きる者たちを夜の闇が癒（いや）すように。闇を受け入れ、自らの力とするのじゃ）
自身を苦しめていた闇の魔力を受け入れることで、逆にナディの力が増していく。
マルコキアスに向かって突き出された掌（てのひら）に現れた黒い玉が膨（ふく）れ上がった。
ナディの口がひとりでに呪文を呟き、魔法陣が浮かび上がる。
「闇の神、ダークミレニアムの名において唱えん。極大消滅魔法『大暗黒（ブラックホール）』」
掌から放たれた黒い玉が、ナディに飛びかかろうとしていたマルコキアスの胴体に直撃した。
「グギャアアアアアアアアアアアアアア！」
黒い玉に触れ、マルコキアスは胴体から二つにちぎれて地面に這い蹲（つくば）った。
「……や、やった……闇の魔公……マルコキアスを倒した……」
魔力を使い果たし、ナディがその場にへたりこんだ時、轟音（ごうおん）とともに洞窟の天井が崩れた。
ナディが上を向くと、巨大な穴から黒竜が様子をうかがっている。
『ナディ！　大丈夫か！』
黒竜から懐かしく、やさしい思念が伝わってくる。
「……リトネ、なの？」
『ああ。待っていろ。「雲竜拳」』
優しい『気』に包まれ、ナディが黒竜の背に導かれた。
『遅れてごめんな』

「……遅いよ。勇者だったらもっと早く助けにきてくれるはずでしょ！」
ナディが泣きながら、黒竜の背中をポカポカと叩く。
『はは、本当にごめん。俺は本当に勇者に相応しくないよな』
リトネはそう答えつつ、ふわりと空に浮かび上がった。
「……綺麗……」
初めて雲の上から世界を見て、思わずナディは感嘆の声をあげる。
つかの間の安堵に浸っていると、突如、強大な闇の波動が地面から突き上がってきた。
ギョッとして目を向けると、身体を黒い闇の霧で覆った巨大な虎が飛び上がって来る。
「……闇の魔公マルコキアス……しぶとい」
『よし。ならば修業の成果をみせてやる……「雲竜雷」』
リトネの咆哮とともに発生した黒雲が、マルコキアスを包みこんだ瞬間……雷鼓が轟き、光輝く雷火がマルコキアスを貫き粉砕していく。
『自然エネルギーから雷を生み出し、敵を滅ぼす技だ。これによって勇者アルテミックは、魔皇帝ダークカイザーの肉体を滅ぼしたと言われている。闇の魔公といえど、瞬殺さ！』
「リトネ……すごい！」
あれほど苦戦したマルコキアスをリトネがたやすく蹴散らしたことに、ナディは嬉々としている。
『へへん。こんな奴、フェザードラゴン様に比べれば……えっ？』

勝利を確信していたリトネが一転、驚愕の声をあげる。
眼前でマルコキアスを包んでいた黒い霧が、虎の姿を形成しはじめた。
「ノワール様の知識が伝わってきた。闇の魔公は肉体をなくしても、新たな器に乗り移ることで復活できるんだって。だからノワール様は肉体を滅ぼすのではなく、マルコキアスを封印し続けてきた」
『そ、そんな！　肉体がない相手をどうやって倒せば……？』

†　ポムペイ山　上空

実体を失い黒い霧となったマルコキアスは周りの『気』を取り込みながら巨大化し、やがて雲となり黒い雪を降らし始めた。
山のふもとにあるポムペイの町が、見る見るうちに黒く染まっていく。
「な、なんだこの雪は？」
「ま、まさか伝説の黒い雪……。みんな、家の中に入れ！」
黒い雪に取り込まれた人々は、あっという間に凍りついていった。

◇　◆　◇　◆　◇

（このままじゃ、この大陸ごと黒い雪で覆われて人間は滅んでしまう）

首にかけている『闇の猫目石』から、ノワールの知識がナディに伝わってくる。

『……まずいな。何とかしないと。でも、どうすればいいんだ……？　闇に対抗できるのは光の魔力だけだし……くそっ！』

いかにリトネが竜王クラスの力を有していても、同じ属性、かつ実体がない相手には無力。

だが――。

「……『闇』で『闇』を滅ぼすやり方はある。リトネ、協力して」

『本当に？　どうすればいい？』

背中に乗せたナディの顔を覗き込むリトネに、ナディは笑いかけた。

「いまこそ、私たち闇のシャイロック一族が世界を救う時。一緒に勇者を超えよう」

ナディがリトネに触れ、ノワールの知識を伝える。

『極大吸収魔法「大虚空（メイルストローム）」か……』

闇の魔力を自ら吸収し、食い尽くす禁断の邪法。

そのあまりのおぞましさに、黒竜となったリトネですら背中に怖気（おぞけ）が走った。

『……でも、失敗したら……この身体でも乗っ取られるかも……』

情けない思念を飛ばすリトネに、ナディが活を入れる。

「闇の魔公一人倒せないで……世界を救えるわけないでしょ！　リトネ、しっかりして。あなたはアルテミックから世界を託された『竜者（りゅうしゃ）』なの！」

その瞬間、『闇の猫目石』から、ノワールの記憶が伝わってきた。

◇　◆　◇　◆　◇

「ノワール、数百年後に現れるという、僕を超える『竜者（りゅうしゃ）』によろしく伝えてくれ」

記憶に映るアルテミックは、物語で描かれているようなイケメンではなく、平凡なおじさんだった。

長年、魔族と戦い続けたせいか、年齢は三十代だというのに髪は白く身体は傷跡だらけ、そして皮膚は皺（しわ）だらけである。さらに、歯が欠け、左手は失われていた。

「確かにおぬしはダークカイザーの肉体を滅ぼし、その魂を封じ込めることに成功するじゃろう。ただし……その戦いの結果、おぬしは闇の気に蝕（むしば）まれ、二度と立てなくなる。その後は……お飾りの王に祭り上げられて、権威の象徴として利用されるだけじゃぞ」

「かまわないさ。それで皆が一つにまとまり、平和な世界が訪れるのなら……」

アルテミックはノワールから悲惨な未来を告げられても、穏やかな笑みを浮かべていた。
「それに、四百年後に生まれる子孫は、おぬしの拳も理想も受け継がぬ『世界を滅ぼす勇者』じゃぞ。それでもよいのか？」
「いいさ。僕の民を守りたいという夢は、僕の拳とともに『竜者』に受け継がれるんだろ？」
アルテミックの目に浮かんでいるのは、未来に対する希望だった。
「僕がダークカイザーの肉体を滅ぼしておけば、未来の『竜者』が楽になるからね」
そう言うと、アルテミックは仲間とともに空へ昇り、ダークカイザーの城へ飛んでいく――そこで、ノワールの記憶は途絶えた。

◇　◆　◇　◆　◇

『……アルテミックって、本当に「勇者」だったんだな。アベルとは大違いだ……』
「……彼こそ、私が憧れた理想の勇者……」
感動に打ち震えるリトネとナディ。
『……あんなふうに……四百年も前から期待されたら、応えないといけないな』
「リトネ、がんばろう。世界を平和に導くために」
『闇の猫目石』から複雑な魔法陣が刻まれた球体が発生し、黒い雨雲を包んだ。

「……極大吸収魔法『大虚空』」
ナディが呪文を詠唱すると魔法陣の輝きが増し、マルコキアスの魔力を吸いとっていく。その魔力の行き先はリトネの身体であった。
「グォォォォォォォォ！」
マルコキアスはすでに虎の形を失い高密度の黒い玉になっていたが、なおも狂ったように暴れ続けている。
『……だ、大丈夫か？　ナディ？』
「わ、私は大丈夫。でも、リトネは？」
『平気……とはいえないな。油断したら身体がバラバラになりそうだ』
黒竜となったリトネの魔力容量をも上回るマルコキアスの魔力により、リトネは凄まじい苦痛を感じていた。
その時、邪悪な意識がリトネの精神に語りかけてきた。
「キサマノカラダヲモラウ……ショセンハニンゲン……ココロヲツケバ……」
マルコキアスはリトネの心を読み取ることで弱点を探り、脳に幻覚を送り込んだ。
人間に戻ったリトネが意識を取り戻したのは、見渡す限り白で覆われた空間の中だった。
「ここはどこだ……え？」

慌てて周囲を見渡すリトネの前に黒い霧が現れ、瞬く間にリトネの姿になっていく。
「俺は……リトネ。リトネ・シャイロックだよ。偽者め」
「俺が……偽者だって？」
「そうさ。本来なら、俺がリトネとして生まれていたんだ。今までずっと、貴様の魂に肉体を乗っ取られ、眠らされていたんだ……俺が女神ベルダンティーから使命を受け、世界を救うはずだった。見せてやるよ。本来の俺によってつくられる真の歴史をな！」
黒リトネが腕を振ると、景色が変じていく。
周囲を見回すと、白一色だった空間がロズウィル村の広場になっていた。
そこには、数年にわたりリトネたちを苦しめていた村長と村人たち。
「ははは！　よくも俺を虐めてくれたな。皆殺しだ！」
黒リトネの命令により、騎士たちが村人の虐殺を始める。
「やめて！　お兄ちゃん！」
必死にすがりついてくるリンを振り払い、黒リトネは笑みを浮かべた。
「貴様だけは生かしておいてやるよ。その代わり一生、俺の奴隷だ」
黒リトネが騎士たちに命令しつつ、リンの首に『隷属の首輪』をつける。
絶望した顔に涙を浮かべたリンはこの日以来、二度とリトネをお兄ちゃんと呼ぶことはなかった。
再び景色が一変して現れたのは、シャイロック家の中庭。

ゴールド・シャイロックの処刑が執行されるところであった。
「リトネ様！　やめて！　お父様を許して！」
必死に土下座して頼み込むゴールドの娘であるナディに、黒リトネが冷たく言い放つ。
「俺を暗殺しようとした罪人にふさわしい罰を与えているだけだ。何の文句がある。やれ！」
黒リトネの命令により、騎士たちがゴールドの首を刎ねた。
その後、泣き崩れるナディに『隷属の首輪』がつけられる。
ナディは抵抗する気力すら失ったのか、死んだような目をして首輪を受け入れていた。
「むごい……どうしてこんなことを！」
リトネの抗議に、黒リトネが冷ややかな視線で応じる。
「決まっている。世界の平和のためだよ。奴らは世界に破滅をもたらす偽勇者のヒロインになる存在だ。だから確実に手に入れておかねばならなかったのさ。婚約者などという生ぬるいやり方じゃなくて、確実に従えられる奴隷としてな」
黒リトネは悪びれることなく、堂々と言い放った。
「だからって……こんな……」
「世界平和のためには、何をしてもいいんだよ。ふふふ」
それからも、黒リトネによるヒロイン奴隷化の様子が映し出されていく。
火の魔公サラマンダーから町を救う代償として、アッシリア大騎士家長女、トーラ・アッシリア

を奴隷にした。
グールの駆除と引き換えに、アンデス領のソレイユ銀爵家の娘、カエデを無理やり奴隷にする。
闇の魔公マルコキアスにより凍りついたポムペイの難民を受け入れる代償として、マリアを奴隷にした。
そして、地の魔公ツチグーモによって甚大な被害を受けたリリパット銅爵家の三女、リトルレット・リリパットも奴隷にした。
一方、勇者アベルは孤独に魔族と戦い続けることで、強大な力を身につけ、ダークカイザーの魂まで消滅させることに成功した。
場面が変わり、魔皇帝との死闘により消耗したアベルが黒リトネに襲撃されている。
「リトネ！　貴様、何をしにきた！」
アベルにかまわず、黒リトネは六人のヒロインを召喚し、一斉攻撃を開始する。
「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
ヒロインたちの魔法により、アベルは断末魔の叫びとともに消滅した。
「……もういいでしょ……。解放して……」
そう懇願するヒロインたちに、黒リトネは冷たく笑った。
「残念だけど、そうはいかない。『隷属の首輪』よ、締まれ！」
黒リトネの命令により、ヒロインたちにつけられた首輪が締まっていく。

「く、苦しい！　なぜ私たちまで！」
うめき声をあげるヒロインたちの耳に、黒リトネが囁く。
「世界を破滅に導く可能性がある女を生かしてはおけないだろう。おとなしく死ね」
その時、幼い少女だったはずのリンが、カイザーリンの姿に変化した。
「やはり魔族が潜んでいたな。念のためにトドメを刺しておいてよかった」
ホッと胸を撫で下ろす黒リトネに、カイザーリンが呪いの言葉を投げつける。
「き、貴様こそ……冷酷無慈悲な悪魔そのものだ……呪ってやる……恨んでやる」
「負け犬の遠吠えだな」
せせら笑う黒リトネの前で、カイザーリンは息絶えた。
「さて……後始末だな」
黒リトネがヒューと口笛を吹くと、上空から真っ白い竜が降り立つ。
「フジ山にいけ。そこでお前を解放してやる。マザーとの契約だからな」
白い竜は黒リトネを乗せると一声鳴いて飛び去り、あとには勇者とヒロインたちの無惨な死体が残るのみだった。
「……ひどい。なんて残酷なことを！」
白一色の空間にリトネの怒声が響き渡った。
「ひどい……か。確かにな。だが、俺にはこんなやり方しかできなかった。俺だって望んでやった

わけじゃない。全て、世界を救うという崇高な目的のために、あえてやったことだ。俺には一片の私利私欲もなかった」
黒リトネが呟く。彼の顔には悲しげな表情が浮かんでいた。
「なぜだ？　他に、もっと穏やかな方法があったはずだ」
そう喚くリトネを、黒リトネが冷ぐ睨みつける。
「どうやって、だ？　お前みたいに前世の知識もなくゲーム知識もない、ただの小僧である俺に何ができるっていうんだ！　これが俺なりの精一杯の世界を救うやり方だったのさ！」
いつのまにか、黒リトネは泣いていた。
「うっ……」
「だが、女神ベルダンティーはこの未来に納得しなかったんだ……。一生懸命、世界を救おうとした俺の魂を無能と決めつけ、異世界から知識チートを持つ魂を呼び寄せ、上書きしたんだ！」
「それが……俺」
リトネは唖然としつつ、なんとか声を絞り出した。
「そうだ。お前だよ。俺の肉体を奪った、泥棒め！」
黒リトネの批難の声に、リトネは言葉を失った。
「前世知識チート。未来知識チート。オトナ精神チート。異世界チートのお前に、俺の人生を否定する資格があるのか？　俺が精一杯……生きるはずだった人生を奪う資格があるのか？」

黒リトネがリトネの罪悪感を刺激する。
「俺と代われ。お前は『俺』にふさわしくない。真に『リトネ』となるべきは、悪名で身を汚したとしても、やるべきことをやってきた俺なんだ！」
黒リトネがリトネに迫る。リトネは何も言い返すことができないまま呆然としている。
しばらく考えた後、リトネが顔を上げた。
「……ヒロインたちを救ってくれるのか？」
「ああ。お前がここまでやってくれたから、後は楽なもんだ。フェザードラゴンがダークカイザーを倒してくれるだろうし。後はアベルを始末し、リンを天空城に連れて行ってカイザーリンの魂を引き剥がせば終わりだ」
そう言われて、リトネは決心する。
「わかった。お前にこの身体を返そう」
黒リトネがニヤリと笑いながらリトネに手をかけようとした時、突如として大声が響いた。
「……その手を取ってはダメ！　リトネ！」
叫び声とともに、黒リトネを遮るようにナディが現れた。
「……ナディ、いいんだ。彼の言うことは正しい。俺は彼の言うとおり、『リトネ』の人生を奪った偽者なんだ」
「……嫌ったら嫌。私にとってリトネはあなただけ。本物も偽者も関係ない！」

「……おい。あんまりウダウダ言っていると、てめえを殺すぞ。俺にとっては、世界さえ救えればヒロインなんてどうでもいいんだからな」
怒りを隠さずに脅してくる黒リトネに対し、ナディが冷たい視線を向けた。
「……確かに、今のリトネは本来のリトネじゃないかもしれない。でも、あなたも偽者。『リトネ』という存在が……世界を救う『竜者』なら、あなたのようなことは言わない！」
ナディに偽者扱いされ、黒リトネが絶叫する。
「俺が偽者だって？　くだらねえことを言っていると……」
「あなたは非道な手を使うのは世界のためで、私利私欲はないと言った」
「それがどうした？」
傲岸不遜な黒リトネと対峙しても、ナディはひるまない。
「ならば……なぜあなたは世界のために、今のリトネに自身を委ねないの？」
「なんだと？」
黒リトネが動揺し始めた。
「世界のために、私欲なく動いているというならば、あなたよりも知識を持ち、同じ志のもとで世界を救おうとするリトネを排除なんてするわけがない。むしろ、率先して全てを彼に任せるはず！」
黒リトネは真っ赤な顔をして震えている。
「あなたの正体は、闇の魔公マルコキアス。リトネの罪悪感につけ込んで、身体を乗っ取ろうとしている悪魔！　リトネ、しっかりして!!」
ナディにそう言われて、リトネの意識ははっきりしてきた。
「ナディ……ありがとう。おかげで目が覚めたよ」
リトネはそう言うと、ナディをかばって黒リトネと向き合った。
「俺はリトネ。たとえ、前世の知識があろうとも……生まれてから、今までずっと『リトネ』だった。そしてこれからもリトネとして世界を救う！」
リトネは黒リトネに手をかけ、一気に魔力を吸収した。
黒リトネが苦痛の声をあげる。だが、リトネの手は離れない。
「ギャアアアアアアアアアアアアアア！」
「クソ……モウスコシデ……ノットレタノニ……」
黒リトネの身体を取り巻いていた黒い霧は、全てリトネの中に取り込まれ、その後には白いリトネが残った。
「ふっ……俺の負けだよ。正真正銘、お前が『リトネ』だ」
白リトネは今までとは一変して、友好的な笑みを浮かべつつリトネに話しかけた。
「……正気に戻ったのか？」
「最初から正気だったさ。お前にぶつけた恨み言は……全て本音さ。マルコキアスは俺の不満や嫉妬心を利用して、同化しようとしていたんだ。俺は最悪の結果になるかもしれないと思いながらも、

立ち読みサンプル
はここまで

奴の誘いに乗って協力してしまった。救世主失格だな」
白リトネは苦笑を浮かべる。
「……あの、ごめん。お前の身体を乗っ取ってしまって」
「いいさ。どの道、お前みたいに上手くやれなかったからな。またお前の内側に戻るさ」
白リトネの身体が徐々に薄くなっていく。
「……リトネ、ごめんなさい」
「気にするな。俺はこいつの中でしばらく眠りにつき、やがてこいつの子供の身体に宿ってまた生まれてくる。お前たちの間に生まれる『貴族のお坊ちゃん』としてな」
白リトネはニヤッとナディに笑いかけた。
「俺がせいぜい楽して生きていけるように、お前たちの代で厄介ごとは全部片付けておいてくれよ。じゃあな。父上。母上」
いたずらっぽい笑みを浮かべつつ、白リトネは消えていった。
「あの野郎。平和な時代に金持ち坊ちゃんとして生まれて、美味しいところだけ持っていくつもりだな」
「……子供子供子供子供……リトネと……」
苦笑するリトネの隣で、ナディが真っ赤になって頭をブンブン振っていた。